

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520457

研究課題名（和文）日本語日本事情教育における汎用性の高い教育シラバス開発のための基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Studies for Development of more Versatile Syllabus in NIHONGO-NIHONJIJO Education

研究代表者

砂川 裕一（SUNAKAWA YUICHI）

群馬大学・社会情報学部・教授

研究者番号：90196907

研究成果の概要（和文）：

日本語日本事情教育論、哲学/比較文化基礎論に関わる関連諸領域の成果を生かしながら、それらを言語文化教育論の原理的な基礎研究へと深化させることを試みた。言語の意味伝達機能についての哲学的な知見を自他関係の場面に増補的に拡張することを試み、新生児が母語と母社会を習得・獲得する原初的・根源的に場面についても検討を進めることで、日常的な言語文化的交流のあり方や日本語教育の文化論的展開の趨勢に対して原理的な観点から寄与しようとした。

研究成果の概要（英文）：

Tried to deepened the contemporary trends in the fields of nihongo-nihonjijo education and philosophical studies of comparative culture into a radical basic studies of lingua-cultural education. Expanding a philosophical points of view of language meaning to the situation of self-other relationship as a communicative funtion of meaning, and also trying to simulate the process when a new-born baby inhabit into his/her mother-tongue and mother-world, we tried to give a fundamental view to the newly developing situation of the nihongo-nihonjijo education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本語日本事情教育論

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本事情教育、言語文化教育、日本語教育、比較文化基礎論、社会哲学、リテラシー論、社会学、言語哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) まず、1992～1993年度、1995～1998年度、1999～2002年度、2003～2006年度までほぼ15年にわたって継続した科研費による「日本事情とその教育」についての共同研究の成果があり、(2) 第二に、2000年に公表された『日本語教育のための教員養成について』(文化庁文化教育部国語科)の中で表明された「日本語教員養成についての新しい考え方」に含意される「日本語教育についての新しい考え方」であった。(3) 第三に、上記科研費による活動の一環として2005年9月に開催した国際研究集会「ことば・文化・社会の言語教育」において、日本、イギリス、フランス、アメリカ、オーストラリアにおける言語文化教育や言語文化教育政策に関わる論者たちと直接議論を戦わせることで得られた成果(研究集会の日英対訳プロシーディング(2005)と総括討論の記録を含んだ単行本『変貌する言語教育』の出版(2007))があった。(4) さらに上記科研費による活動の一環として、1999年以来年1冊のペースで、学術論文集『21世紀の「日本事情」』とそれに続く『リテラシーズ』を刊行(共にくろしお出版)してきたことによる議論の広がりの中から得られた成果も研究開始当初の背景として挙げる事ができる。

また、国内外の研究動向としては、(1) 多言語・多文化社会における第二言語教育や異文化共生教育の動向やそれを支える言語文化教育政策のあり方についての研究や報告など(例えば、Byram(ed.)(2003) Intercultural Competence、国際交流基金(2005)『ヨーロッパにおける日本語教育とCommon European Framework of Reference for Languages』など)があり、また、(2) 日本語学や言語学における談話語用論的な研

究の隆盛、(3) 日本語教育や第二言語教育などにおける言語習得の具体的過程における文化的・社会的な契機の介在や、言語習得と自我形成や自己アイデンティティの獲得との相補的關係に関わる理論的・実践的研究の進展(上記の、文化庁による『日本語教育のための教員養成について』、『21世紀の「日本事情」』や『リテラシーズ』誌上の諸論考など)、(4) 学習心理学や理論社会学や社会哲学などの領域における、言語と社会、言語と文化、言語獲得と世界獲得の相補性などについての、言語や記号を基軸モデルにした研究の拡大、とりわけ20世紀中頃以降に展開された現象学系の社会理論や社会哲学理論なども、研究開始当初の背景として挙げることができる。

2. 研究の目的

(1) 「日本事情とその教育」に関する共同研究の成果を再吟味・再検討して、そこに見られる萌芽的な考えや試行的な試みを、現在の研究水準に照らしてより具体的に展開させつつ、「日本事情とその教育」が理論的・実践的に蓄積してきた言語文化教育論的な観点を再構成すること。(2) この「再構成」を通じて、言語的な運用力を育む「日本語教育」と言語運用の社会的・文化的妥当性についての理解力を育む「日本文化教育」との統合カリキュラム、並びに「日本語教育」と「日本研究専門教育」との統合カリキュラムの開発につながる基礎理論的な立脚点を整理構築すること。(3) また、主として「欧州共通参照枠」などに現れている社会的実践能力と言語運用力と文化的社会的体験との統括的な把握方法やツールの開発、並びにそれらの経歴が個人個人の言語的・社会的・文化的な実践力としての総合的な評価法確立への

試みに対しても基礎理論的な観点から吟味検討を加えること。(4) さらに、実際の教育現場を直接観察し、授業担当者と理論的・実践的な問題点や可能性などについて直接的な意見交換を行い、「言語・社会・文化の統括的教育実践の理論化」という「言語文化リテラシー教育」に関わる理論と実践との具体的媒介形態の原型モデルを構築提示すること。以上であった。

3. 研究の方法

本研究は、「研究目的」でも触れたように、多様な教育現場において活用できる汎用性の高い教育プランの企画立案を目標とし、研究方法としては基本的には文献研究であった。(1) 思想史的・哲学的な立脚点を確保するための文献研究が、また他方において、(2) 教育現場における具体的・実践的な活動実態の特徴や可能性を把握するための訪問聞き取り調査研究が必要であると考えた。

これらの文献研究と調査聞き取り研究とをほぼ並行して行い、関連諸領域の知見の吸収と教育現場の実態や教育政策の理論的な背景についての実情把握を蓄積していくことで、総合的かつ包括的な教育プラン・教育シラバスの汎用性を確保しようと試みた。

関連諸領域として、まず、グローバル化する世界とリージョナル化する地域社会を視野に入れること、その意味では情報化社会を扱う社会情報学やメディア・リテラシー論など、民族的・宗教的な相互関係を念頭におく比較文化論や現代社会論など、また国際的な相互関係を政治的・経済的な観点から視野に収める交際関係論などを念頭におく必要がある。また、「研究目的」の項でも触れた「日本語教員養成プログラムの新しいシラバス」にも見られるように、社会学、心理学、文化論、言語学や教育学、教育政策論など、そし

ていうまでもなく日本語学や日本語教育学、日本事情論などにもその広がりを見せる。

上記のような包括的な諸領域の中から言語の意味の獲得と伝達に関わる基礎領域に視野を限定して主として文献研究を行った。

4. 研究成果

研究成果としては主として以下の3つに整理できる。

(1) 廣松渉の著作の中に散在する言語(ないしは記号的存在)についての記述を再読整理して理解を深め批判的視点を確認したこと。廣松渉は膨大な著作を残したが「言語」に関してはまとまった体系的な記述を残してはいない。彼の哲学体系において言語ないし記号的存在は中枢的な位置を占めていることは確かであるが、しかし著作が膨大でありまた難解でもあったため、解釈的な再構成は十分には為し得ず、今後に大きな課題を残したままとなった。しかし、言語的意味の多重性を指摘し、それが言語存在の機能的多重性、意味伝達機能の多重性に震源することを指摘している。報告者としては本研究の過程で、この言語存在の多重性と意味伝達機能の多重性との間には微妙なずれが存在しており、このずれが自他関係場面における双方向の伝達の実態を明らかにする手がかりを提供すると考えるに至った。物象化された相における言語の機能分析とコミュニケーションにおける言語的意味生成に即した伝達機能の分析とのずれでもある。

(2) このずれを念頭に置きつつ、自他関係の場面において意味伝達機能の実態を分析的に記述し、廣松の考えを増補的に拡張しつつ伝達場面における言語ないしは記号の存在様態について、新たな視点を提供したこと。廣松は言語的意味機能を、指示、述定、表出、喚起の4つの機能が入れ子型に複合してい

ると指摘した。報告者としては、言語の4機能が言語の機能として成り立つ記号的な前提として、「記号的な設え」準位が存在することを指摘して、自他関係場面における4つの準位として再構成した。

(3) また、その「設え」が設えとして機能し得るためには、原初的な感受によって「言語」と「その言語を媒介してない存在する世界」が獲得されることが必要ではないかと考え、いわゆる新生児の心象世界をシミュレートすることで、言うところの原初的感受の根源の様相を思考実験的に記述しようとした。

(4) 上記の点については、論文や講演などの機会を捉えて発表し、読者や聴衆から好意的な反応を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①砂川裕一、言語構造の多重性とコミュニケーションの基礎構造、The 2nd International Symposium of the Department of Asian and African Studies, Faculty of Arts, University of Ljubljana: “IMPROVEMENT IN COMMUNICATION” 論集、2012、査読なし、掲載決定

[学会発表] (計1件)

①砂川裕一、言語構造の多重性とコミュニケーションの基礎構造、The 2nd International Symposium of the Department of Asian and African Studies, Faculty of Arts, University of Ljubljana: “IMPROVEMENT IN COMMUNICATION” (招待講演)、2012. 3. 15、University of Ljubljana (Ljubljana, SLOVENIA)

[図書] (計8件)

* 以下の著作は編集委員会の一人として、原稿の募集、査読、編集等に関わり、「共編者」として出版したものである。

①リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『リテラシーズ』第10巻、2012/2、44

②リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『リテラシーズ』第9巻、2011/8、40

③リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『リテラシーズ』第8巻、2011/1、40

④リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『リテラシーズ』第7巻、2010/7、40

⑤リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『WEB版リテラシーズ』第6巻2号、2009/12、21

⑥リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『WEB版リテラシーズ』第6巻1号、2009/6、21

⑦リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『WEB版リテラシーズ』第5巻2号、2008/12、(総ページ数不明)

⑧リテラーズ編集委員会 (砂川裕一、他)、くろしお出版、『WEB版リテラシーズ』第5巻1号、2008/6、(総ページ数不明)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

砂川 裕一 (SUNAKAWA YUICHI)
群馬大学・社会情報学部・教授
研究者番号：90196907

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：